

砂山すなやまのやしきときつね(下氏家町)

むかし、下氏家しもうんせから二丁掛にちやうかけにかけては、森もりや林はやしが続ついていて、昼ひるでも暗くく、きつねやたぬきなどがたくさん住すんでいたということです。

その中なかに、少すこし高たかくなつた丘おかがあり、そこを砂山すなやまと呼よんでいました

砂山すなやまには、あるとの様ようのけらいで、川地平馬かわぢへいばというさむらいが住すむ大きなやしきがありました。

そのやしきは、一けんだけはなれたところにあり、大きなくるみの木やとがの木などがしげっていて、近ちかくに住すむきつねがいつも木の实みをとりにきたり、いたずらをしたりしていたそうです。

ある天てん氣きのよい日、おさむらいさんの家いえでは、朝あさから戸とを全ぜん部ぶあけて、下働しもたわきのおよねが大おすうじ

をはじめました。家いえの中は、すみずみまではつきり見えるので、きつねが中の様よう子しをうかがっています。

お昼になると、きつねの大好きだいすきな油あぶらあげをにるにおいが、あたりじゅうにひろがって、きつねにはとてもたまりません。

「なんとかして、あの油あぶらあげをちょうだいしたいものだ。」



と、考えました。でも、昼の明るいうちにこの
「近づくと、すぐにおいはらわれてしまうので、
がまんして夜になるのを待つことにしました。」

夜になると、いつもはぴったりと戸がしめられ、
星あかりで屋根の形しか見えなかった家から、今
日はあかりがもれているのが見えるのです

「こいつはしめた！およねが戸をしめわすれてい
るぞ。今夜こそ……。」

と、きつねはおどろしてよろこびました。



さて、やしきのおよねは、その日はとてもいそ
がしくて、夕方にしめるはずのえんがわの雨戸を
しめわすれているのを思い出し、

「大へんだ。早く戸をしめなくては。」

と言つて、あわてて戸をしめはじめました。一ま
い2まいしめたところに、二丁掛の方にポツとあ
かりが見え、それがだんだん近づいてきて、やが
て火の玉となつてどンドン大きくなつてきます。

よく見ると、その中に男の人のすがたがうつつ
ていて、見る見るうちにすぐ目の前まできてしま
つたのです。およねはびっくりして、大あわてで
さいこの戸を、

「ピシャッ」

と、しめました。すると、

「ガリ ガリ ガリ」

という、雨戸をつめで引くかくよつな大きな音がして、

「これは ざんねん！。」

と、くやしそうに言っている男の声が聞こえてき

ました。

およねは、こしがぬけてしゃがみこんみ、しばらくは口もきけません。

やつとのことで立ちあがったおよねは、このことを主人に知らせると、

「それは、きつねが火の玉になって化けてきたにちがいない。これからは早めに戸じまりをして

おけ。」

と注意されました。

次の朝、雨戸を見たら、つめで引っかいたあとが、何本ものこっていたということです。